

高血圧発現の予測因子に関する研究: 地域における10年間の追跡研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/15031

学位授与番号	医博甲第1064号
学位授与年月日	平成5年3月25日
氏名	三浦克之
学位論文題目	高血圧発現の予測因子に関する研究 —地域における10年間の追跡研究—
論文審査委員	主査 教授 岡田 晃 副査 教授 橋本 和夫 教授 竹田 亮祐

内容の要旨および審査の結果の要旨

高血圧症の早期発見・早期治療に加えて、最近では第1次予防が、より重要とされてきているが、それには高血圧発症の予測因子を明らかにしなければならない。その際、高血圧発症後の二次的臓器障害の影響や生活習慣改善などの介入が入らないようにするためには、正常血圧者を追跡した縦断的研究が不可欠であるが、その知見は少ない。本研究では、正常血圧者を10年間追跡し、生命表法および重回帰型生命表法であるCox比例ハザードモデルを用いて、定期健康診査における諸検査及び生活習慣の中から高血圧発現の予測因子を明らかにすることを試みた。—地域における正常血圧の成人男女265人を観察コホートに設定し、10年間の高血圧発現を追跡した分析結果は以下の通りである。

単変量解析として各項目2群間の高血圧累積発現率曲線の差の有意性について一般化Wilcoxon検定を行なったところ、収縮期血圧120mmHg以上、拡張期血圧75mmHg以上、血清グルタミン酸オキザロ酢酸トランスアミナーゼ20KU以上、血清グルタミン酸ピルビン酸トランスアミナーゼ15KU以上、血清 γ -グルタミルトランスベプチダーゼ(γ -GTP)10IU/l以上、年齢50歳以上、Body Mass Index 22kg/m²以上、血清クレアチニン1.2mg/dl未満の各群が有意に高い高血圧発現率を示した。次に、各項目間の相互関連の影響を除外するためにCox比例ハザードモデルを用いて多変量解析を行なったところ、収縮期血圧、血清クレアチニン、血清 γ -GTP、年齢が有意な独立した高血圧発現予測因子となり、ハザード比は、収縮期血圧120mmHg以上の群で3.52、血清クレアチニン1.2mg/dl以上の群で0.40、血清 γ -GTP 10IU/l以上の群で2.30、年齢50歳以上の群で1.53を示した。以上の結果より、最も重要な高血圧発症予測因子は追跡開始時点の血圧値であったが、血圧値の高血圧一次予防における重要性が再確認された。また、高血圧発症の予測因子として血清クレアチニンの比較的低値が抽出されたが、このことは本態性高血圧の素因としての腎血行動態の異常との関連を推察させるものであり、さらに、血清 γ -GTPも飲酒習慣とは独立して高血圧発症に関与していることが示唆された。

以上、本研究は高血圧一次予防対策における高血圧発症高危険群抽出のための有益な知見を提供したもので、保健医学、予防医学の領域に寄与する貴重な労作として評価された。